市民提案協働事業一覧

No.	テーマ	事業名称	提案団体	担当課
1	自由	「青梅の森の赤ちゃんカフェ」事業	特定非営利活動法人かぷかぷ山のようちえん	子ども家庭支援課 公園緑地課
2	自由	うごいて　つくって　なりきって「体験ワンダーランド IN 青梅」	特定非営利活動法人子どもと文化のＮＰＯ子ども劇場西多摩	社会教育課
3	3	森林資源（山の恵み）を様々に利用して、青梅の森林。林業を元気に	３世代先につなげる里山生活協議会	農林水産課
4	自由	オリンピック銀メダリスト・平野早矢香氏卓球講習会 「東京２０２０大会に向けジュニア世代の意識向上を目指す」	青梅卓球連盟	スポーツ推進課 オリンピック・パラリンピック担当主幹 社会教育課
5	自由	日本サッカー協会コーチングスタッフによるトレーニング～子どものやる気を引き出すスポーツ指導術～	（一社）青梅市サッカー協会	スポーツ推進課 社会教育課

【自由提案】
市民活動団体が市と協働で実施したい事業について、自由な発想で提案するもの

【行政テーマ提案】
市が設定した次のテーマについて、事業を提案するもの
1　東京２０２０大会に向けたパラリンピックパラリンピック気運の醸成
2　女性活躍サポート事業
3　森林資源（山の恵み）を様々に活用して、青梅の森林・林業を元気に

事業報告書

事業名　青梅の森の赤ちゃんカフェ

１　実施団体
かぷかぷ山のようちえん
２　担当課
子ども家庭部子ども家庭支援課
３　実施時期
2018 年６月～2019 年３月　計 10 回
４　参加者
０歳児の親子
５　実施場所
青梅市内の自然公園

６　事業の目的
自然の中での０歳児親子の触れ合い交流事業により、青梅ならではの豊かな自然を生かして、子どもを産み育て、将来にわたり暮らし続けたいまちを実現することを目的とする

７　役割分担
・団体の役割
事業の企画、運営、実施

・担当課の役割
情報提供、広報周知、会場確保、事業実施への協力

８　事業の効果（どのような地域課題が解決できたか）
・０歳児期の外遊びをどこでしたらいいかわからない、一緒にお外で遊べる仲間がいないという親子の子育ての状況に対して、定期的に自然の中で一緒に遊び交流する場を用意したことで、月ごと、

季節ごとなどそれぞれ親子のペースに合わせて参加されました。
・仕事復帰で保育園に入られる方が多くいらっしゃいますが、０歳児の卒業時期になっても続けたいと、１歳以上でも参加できる団体事業へ継続参加を希望される親子も６組いらっしゃいます。
・障害とともに育つ親子も数組参加されました。
自然とのふれあいで感性をはぐくみ、様々な子どもたちと、ともに遊ぶことで、地域の中での輪を広げることができたのではないかと思います。

９　目標達成

事業の目標：
延べ 100 名の０歳児およびその親の参加
目標の達成具合：
７５％　延べ７５名の０歳児およびその親の参加

２回以上参加された方に参加前・後のアンケートを実施し、下記のような結果が得られました。（有効回答人数：12 名）
青梅という町が好き　…　91%　→　100%
青梅に住み続けたい　…　41%→　100%
子どもの育ちを安心して見守れている　…　75%　→　100%
青梅の自然環境に関心を持っている　…　58%　→　100%

参加者の感想としては、下記のような声をいただいております。
「とても楽しかったです。葉っぱの上をゴロゴロしたり、なかなか出来ない経験をさせてもらいました。スタッフの方達も親しみやすく、楽しく参加できました。」（６か月で参加）
「どんな感じになるんだろうと、楽しみにしていました。本当に自然の中で、普段絶対一人ではやらないような葉っぱの上にゴロゴロしたり、木漏れ日を感じたり気持ちいい風に吹かれて、子供にもきっといい刺激になったのではと思います。特にぐずったりせず、ニコニコしていました。野生動物を見れたときは私も大興奮でした。長年青梅に住んでいますが、こんなステキな場所があったなんて知りませんでした。ありがとうございました。」（５か月で参加）
「子どもとおおらかに過ごせるようになりました」（８カ月で参加）
「青梅の自然は大好きだったのですがなかなか一緒に遊べる仲間がいなく、自然の知識もなく心配でした。仲間がたくさんできて、青梅にもこんなにすてきな人たちがいるのかとうれしかったです。夢中になっている子どもの姿を見て、子どもってほんとに自然が大好きなんだな～と実感しました」（10 か月で参加）
このような声をいただいています。

10　事業の実施内容

・季節ごとの自然を感じる遊び、絵本の読み聞かせ、ゆったりと楽しむ時間をもつプログラムを合計 10 回開催しました。
　６月 29 日　青梅の森ムササビ広場で開催。ムササビやカモシカも出てきてくれて、青梅の自然を満喫しました。草や落ち葉でゴロゴロを楽しみました。

参加 15 組 30 名
　７月 20 日　霞丘陵公園であじさい、氷、水の遊びを楽しみました。参加７組１４名
　８月 31 日　釜の淵公園で川遊びとかき氷を楽しみました。参加６組 12 名
　９月 21 日　天寧寺で雨の散歩を楽しみました。参加５組１０名
　10 月 19 日　ムササビ広場でどんぐり拾いをしました。参加８組 16 名
　11 月 16 日　御岳渓谷で紅葉をみたり触ったり、河原で砂遊びをしました。
　　参加９組 18 名
　12 月 14 日　ムササビ広場の落ち葉のプールで遊びました。参加８組 １６名
　１月 18 日　　ムササビ広場で、氷や霜を触って遊びました。参加６組１２名
　２月 15 日　　永山ふれあいセンターで、雨さんぽ。落ち葉で遊び梅の香りを
　　かぎました。参加６組１２名
　３月 15 日　ムササビ広場でおたまじゃくしに触れてみたり、春の草花を触ったり、落ち葉で遊びました。参加５組１０名

・雨天であった９月、２月は場所のみ変更して雨さんぽを実施しました。
・参加後のアンケートでは、「初めて原っぱで遊んだ」「友達ができた」「青梅に住んでいるがはじめてきた自然の場所だった」など好評だった。
・冬場（12 月～３月）は申し込みも少なく、感染症の流行などから、当日の体調不良等によるキャンセルが多くありました。

11　実施団体と担当課の事業評価
　４はい ３どちらかといえば「はい」 ２どちらかといえば「いいえ」　１いいえ

調査項目	団体	担当課
(1)事前の話合いを十分に行い、役割分担は明確になっていた	４	４
(2)事業に最もふさわしい協働形態が選択された	４	３
(3)協働の役割分担は適切だった	４	３
(4)協働相手は適切だった	４	４
(5)対等な立場での協力関係を築けた４	４	４
(6)協働相手の自主性・自立性は尊重された	４	４
(7)事業実施は円滑になされた	４	４
(8)設定した目標が達成された	３	３
(9)協働で行うことにより効果がある事業だった	４	４
(10)今後の課題と改善策をお互いに話し合った	３	３

12　まとめ（今後の課題や改善点など）

・実施時期に関しては、１２～３月の冬場は寒さで申し込み数がかなり低くなる傾向がありました。また申し込みはあっても、当日の体調不良等でのキャンセルも多くあり、冬場は特に感染症による影響が大きかったです。比較的感染症も少なく、親も外に出た

くなる春～初秋に、月複数回できていれば、参加親子の目標値は達成できたのではないかと思っています。

・青梅市に長く住まれている方、あるいは出身が青梅の方でも各所の青梅の自然公園を案内するたびに、「こんなところに来たことがなかった」「知らなかった」という声を多くいただきました。青梅市のすばらしさである自然の豊かさや、資源である自然公園を生かしながら、地域の親子にとってふるさとの自然の風景を増やしていく、青梅市にとってとても意味のある事業だと実施して改めて感じています。

・弊団体は八王子市在住のスタッフもいるため、今年度は八王子市で同様の協働事業を実施予定です。青梅発、自然の中で親子が育つ事業を、これからもご支援のほどよろしくお願いいたします。

13　その他

・広報や事業費でご協力いただきながら弊団体が運営する、今回のような事業協力の形態で、参加者の多い季節に絞って、数年間継続して市と協働しながら実施していければと思いますが、いかがでしょうか。ご検討いただけますと幸いです。

事業報告書

事業名
うごいてつくってなりきって体験ワンダーランド IN 青梅

1　実施団体

特定非営利活動法人子どもと文化の NPO 子ども劇場西多摩

2　担当課

社会教育課

3　実施時期

平成 30 年９月６日及び平成３０年 10 月１３日

4　参加者

市内在住親子及び小学生・中学生・高校生・大人 84 名

5　実施場所

下長淵第二第四自治会館

６　事業の目的

現在、文化芸術活動による地域再生が強く全国的にも求められています。特に児童青少年の活性化は地域の大人たちの希望となり、地域で障がいのある人、児童青少年、女性、高齢者まで全ての人を包括できる文化芸術活動は、地域を活性化し、全ての人を元気にしてくれます。私たちは子どもから広げ、障がいのある人、女性、高齢者等全ての人を巻き込んだ文化芸術活動を通して、青梅市の共生社会実現に向けた芸術文化プロジェクトを企図しました。実施場所を下長渕自治会館にした理由は、自治会館を多世代交流センターにしていきたい思いから、「子どもステーション」を実施している実績が当法人にあり、子ども達が自身で来ることのできる場所で、地域に住む乳幼児連れの親子からお年寄りまでが参加できる取り組みとして行いたいためです。

本事業では、３名のアーティストによる、アート体験活動を行い、参加者は一日を通じて２つのアート体験ができます。デジタルがこれだけ広がっている中、リアルな人との出会い、魅力的なアーティストとの出会いができるアナログな交流の世界を届け、地域に住む人々が「顔見知り」になり、文化体験を通じたコミュニケーションを広げることを目的としました。

７　役割分担

・団体の役割

体験ワンダーランド IN 青梅の企画・運営・実施

・担当課の役割

広報・学習会の参加者受付・当日受付・記録

８　事業の効果（どのような地域課題が解決できたか）

今回実施場所を下長渕第二第四自治会館にすることで、特に下長渕地域における社会課題（地域におけるコミュニケーション不足、面識社会の広がりの不足）を、アート体験を実施することにより、解決のひとつになる取り組みを行うことができました。１日を通じて 84 名の参加者があり、３名のアーティストによるコミュニケーションを促すアートプログラムの中で、知らない人とも目と目を合わせたり、トイレットペーパーでできた

森を探検するなど、楽しみながら地域に住む人々が「顔見知り」になり、文化体験を通じたコミュニケーションを広げることにつながりました。
また、下長渕地域に関わらず、今子ども達の間でデジタルな体験がこれだけ広がりスマホに保育をさせてしまう時間が増えている中で、リアルな人との出会い、魅力的なアーティストとの出会いができ、親子が一緒に体を動かし、目と目を合わせるアナログな交流の世界を届けることができたことの意義が大きくありました。

９　目標達成

事業の目標：・体験ワンダーランドへの参加者を定員いっぱいにし多くの方と本事業の楽しさを体験し、地域の人々がつながることを目指します。

・また多世代交流センターのひとつのモデル事業として行い、地域づくりの実績をつくります。

・ボランティアスタッフを当法人以外にも募集し、学び、当日を迎えることで、文化事業を通じた人づくりに取り組みます。

目標の達成具合：

・各体験定員 20 名×3 体験×２回（午前午後）でのべ 120 人の体験者を目標としていたところ、のべ体験人数合計 155 名となり、地域の体験者を広げるという目標を、大きく達成することができました。

・多世代交流センターのモデル事業としても、地域の０歳から６０代までが集まり、面識社会を広げることができました。昼食時にカレーを提供し、大きな和室で一緒に同じご飯を食べるという交流も、体験ワンダーランドと相まって良い効果をもたらしました。

・ボランティアスタッフ募集の結果、当法人以外のボランティアスタッフの参加が４名ありました。また日頃子どもステーションに関わるスタッフも若い世代であり、なぜこのような取り組みが地域課題解決に役に立つのか、改めて学ぶことで深めることができました。

10　事業の実施内容

平成 30 年 9 月 6 日

「体験ワンダーランド説明会＆学習会」

＊文化活動の意義・体験ワンダーランド実施の意義を学ぶ

講師　森本真也子氏（子ども文化地域コーディネーター協会）

参加者 19 名　＊別途当日資料添付

平成 30 年 10 月 13 日

「うごいて　つくって　なりきって　体験ワンダーランド IN 青梅」

＊３組のアーティストによる３つのアート体験を午前・午後の２回ずつ実施。３つの体験のうち参加者は１日を通して２つの体験に参加する。

体験名/講師

からだで表現あそび　楠原竜也/近藤理恵

トイレットペーパーの森　中根久寧/小林真利子

忍者アクション　石田武/仙波恵理

プログラム

10:00～10：30 オープニング　今日できる３つの体験を紹介

10:30～12:00　アート体験①

からだで表現あそび　参加者 27 名

トイレットペーパーの森　参加者 24 名

忍者アクション　参加者 27 名

12:00～13:00　ランチタイム　カレーで大昼食パーティー

13:00～14:30　アート体験②

からだで表現あそび　参加者 28 名

トイレットペーパーの森　参加者 27 名

忍者アクション　参加者 22 名

14:30～15:00　エンディング　今日行った３つの体験をシェア

15:00～15：45　片付け・講師スタッフ振り返りまとめ

11　実施団体と担当課の事業評価

４はい　３どちらかといえば「はい」　２どちらかといえば「いいえ」　１いいえ

調査項目	団体	担当課
(1)事前の話合いを十分に行い、役割分担は明確になっていた	4	4
(2)事業に最もふさわしい協働形態が選択された	3	3
(3)協働の役割分担は適切だった	4	3
(4)協働相手は適切だった	4	4
(5)対等な立場での協力関係を築けた	3	4
(6)協働相手の自主性・自立性は尊重された	4	4
(7)事業実施は円滑になされた	4	3
(8)設定した目標が達成された	4	4
(9)協働で行うことにより効果がある事業だった	4	3
(10)今後の課題と改善策をお互いに話し合った	2	2

12　まとめ（今後の課題や改善点など）

青梅市長淵地区という小さい単位の地域密着型で実施することにより、地域社会により働きかけることができるということを、今回の取り組みで実証できたように感じています。文化・アートというものが、一部の愛好者のためのものでなく、より良い市民社会の醸成に役立つものとして、今後このような活動が青梅市の各地域で展開できたらと考えました。

また今回協働事業として取り組むことで、青梅市のツイッターでの広報をしてくださったからこそつながった若い世代のボランティアスタッフもありました。また協働事業で行うことにより、文化体験で広がるコミュニケーションの実態・効果を、市の担当課、地域住民、ボランティア、当法人スタッフと広く共に感じ合えることができたように思います。様々ご協力頂き、協働事業として非常に有意義な活動になりましたこと感謝申し上げます。

１３　その他

今回の事業は市民提案協働事業として、私ども市民の側から「事業」を提案し、実施させて頂きました。今後青梅市の「協働事業」として考えた

とき、社会課題を共にみつけ、何を実施すべきなのか行政と市民が考え合い実行に移すような協働の形での事業も創っていけたらと考えました。

事業報告書

事業名

「森林資源(山の恵み)を様々に活用して、青梅の森林・林業を元気に」

１　実施団体　　３世代先につなげる里山生活協議会

２　担当課　　農林水産課

３　実施時期　　平成３０年６月１日～平成３１年３月 31 日

４　参加者　　都市住民・地元住民の方で、森林・林業に興味のある方

５　実施場所　　青梅市内山林

６　事業の目的　　青梅市内の半分以上ある６３％の森林の活用

７　役割分担

●団体の役割

- 森林資源を活用する体験イベントの運営
- 森林資源を活用したものづくり
- 都市住民への PR

●担当課の役割

- 山林情報の提供
- 森林所有者とのマッチング
- 市民や都市住民に向けての広報

８　事業の効果（どのような地域課題が解決できたか）

都市住民や地元住民のを対象に、街と人と森との繋がりを伝え、青梅市内の森林・林業に対する意欲が高まり、森林資源の有効活用が図れた。

９ 目標達成

事業の目標：市内山林を活用しながら、参加者、スタッフ一同、森林資源に触れあい、体験活動を通じ、都市住民と地元住民との相互交流を図るとともに、森林資源を使ってできた作品（テーブル・ベンチ等）を活用していくことを目標とする。

目標の達成具合：市内山林を活用しながら、参加者、スタッフ一同、森林資源にふれあい、体験活動を通じ、都市住民と地域住民との相互交流ができた。また森林資源（間伐材）を使ってできた作品（丸太ピクニックテーブル×2 セット）も出来上がり、森林所有者の許可の元、山林内に設置ができた。

10　事業の実施内容

●6/１㈮以降より、青梅市農林水産課と３世代先につなげる里山生活協議会（※以下略称：３世代里山協議会）で、森林資源の利活用できる山林の選定、資料の確認、利用許可の申請、承認。

●7/22㈰　８～９月以降に予定する第１回目のイベント実施に向けた準備
青梅市成木４丁目の山林（※以下　あまがさすの森）で、山林の調査、危険木などの除去、小川の清掃を行った。
※スタッフ３名

●9/17㈪　第１回目のイベント開催

あまがさすの森にて、森林資源を活用するために必要な森や木の見方、手入れの方法（除間伐）などを実施した。

※スタッフ５名／講師１名／農林水産課職員２名

参加者６名（内、職員２名含む）総勢 12 名

※チラシイメージ写真より

●10/21㈰　第２回目のイベント実施に向けた準備

あまがさすの森にて、スタッフメンバーで枯れ木や、危険木の除去を行った。

※スタッフ３名

●11/23㈮　第２回目のイベント開催

あまがさすの森にて、参加者ともに青梅幼稚園の園児保護者、保育士も交え、雑木林の手入れ（除間伐）を実施した。また第１回目で間伐した木を丸太に造材し作品（丸太ピクニックテーブル×2 セット）にするため、広場まで運び出しました。

※スタッフ５名／講師 １名／農林水産課職員２名

参加者 34 名（内、こども 16 名　職員２名含む）　総勢 40 名

※チラシイメージ写真より

●1/20㈰　第３回目のイベント実施に向けた準備

あまがさすの森にて、運び出した丸太から作品（丸太ピクニックテーブル×２セット）をつくるにあたり、皮むきや骨組みの下準備を行った。

※スタッフ３名（他講師と体験希望者）

●3/17㈰　第３回目のイベント開催

あまがさすの森にて、第１回目、第２回目で、間伐、運び出した丸太を利用しピクニックテーブルを参加者とともに２セットを作成した。

また、うち１セットは、あまがさすの森の沢すじに、もう１セットは、尾根すじに、設置した。

スタッフ５名／講師１名／農林水産課職員３名

参加者 12 名（内、こども２名）　総勢 21 名

※チラシイメージ写真より

11　実施団体と担当課の事業評価

４はい　３どちらかといえば「はい」　２どちらかといえば「いいえ」　１いいえ

調査項目	団体	担当課
(1)事前の話合いを十分に行い、役割分担は明確になっていた	4	2
(2)事業に最もふさわしい協働形態が選択された	3	3
(3)協働の役割分担は適切だった	4	3
(4)協働相手は適切だった	4	3
(5)対等な立場での協力関係を築けた	4	3
(6)協働相手の自主性・自立性は尊重された	4	3
(7)事業実施は円滑になされた	4	3
(8)設定した目標が達成された	4	3
(9)協働で行うことにより効果がある事業だった	4	3
(10)今後の課題と改善策をお互いに話し合った	3	2

12　まとめ（今後の課題や改善点など）

- 今回のイベントでは、天候に恵まれ屋外でイベントが開催ができたが、雨天時のプログラムを考えると、施設が隣接している山林での、イベント実施が望ましい。
  （案：隣接する自治会館、空き家、小中学校等の利用）

- 山林をフィールドにする場合、森林所有者からの情報提供や境界調査、隣接森林所有者への挨拶が事前に必要である。
  （案：青梅市内の森林所有者情報の集約化と境界情報の集約化）

- 今後、このような森林の魅力を伝えたり感じたりする企画は、増える傾向にあると思うが、経験者、指導者、行政職員が不足している。
  （案：指導者育成、地域林政アドバイザーの活用など）

13　その他

本事業を通じ、以下３つの動きが生じた。

① あまがさすの森、近隣住民との交流により、山林の利用について、承諾いただける方が増えた。

② イベント以外にも、様々な人たちが、あまがさすの森を訪れ、森林空間の利用を始めた。青梅幼稚園や成木保育園、子育て中のママたちによる、幼児森林体験（森のようちえん）の場として利用されるようになった。

③ 東京都小学校社会科教育研究会の教職員をはじめとする方々が、小学５年生の社会科の授業「わたしたちの生活と森林（小単元名）」の授業内容の作成のため、都教職員 15 名程が、あまがさすの森に訪れた。普段あまり関わることのできない人たちとの交流ができた。また 2/22㈮には、小金井市立東小学校で行われた研究発表会に招かれた。青梅市内でも森林教育に対しもっと興味を持っていただく必要性を感じた。

以上

事業報告書

事業名　ロンドンオリンピック銀メダリスト平野早矢香氏卓球講習会

１　実施団体

青梅市卓球連盟

２　担当課

オリンピック・パラリンピック担当、社会教育課

３　実施時期

平成３０年８月５日　ほか

４　参加者

２５５人

５　実施場所

市立霞台中学校体育館　ほか

６　事業の目的

ロンドンオリンピック銀メダリストである平野早矢香氏の生の声、プレー等を通じて、オリンピックレガシーのムーブメントを起こし、２０２０年東京オリンピック・パラリンピックの機運醸成を図ること

７　役割分担

・団体の役割

イベントの事前準備、当日の運営全般

・担当課の役割

会場校への協力依頼文書の提出、当日会場に設置する横断幕の作成、市長日程調整等

８　事業の効果（どのような地域課題が解決できたか）

ロンドンオリンピック銀メダリストである平野早矢香氏の生の声、プレー等を通じて、オリンピックレガシーのムーブメントを起こし、２０２０年東京オリンピック・パラリンピックの機運醸成を図ることができた。

また、お楽しみ企画として、平野氏直筆サイン入りの色紙等が当たるお楽しみ抽選会を実施し、会場は大いに盛り上がりました。

さらに、後日、当日の講習会の様子を写真入りの報告書という形で市役所本庁舎２階の市民活動ＰＲコーナーおよび総合体育館で掲示し、参加者以外にも当日の様子を伝えることが出来ました。

９　目標達成

事業の目標：

平野早矢香氏の講演、プレー等を肌で感じることで、卓球というスポーツを通じて、２０２０年東京オリンピック・パラリンピックへの興味・関心を持ってもらうこと。

また、子どもたちに同氏の意識・心構えを伝え、壁にぶつかった時、苦しい時に負けない心を持ってもらうこと。

目標の達成具合：

おおむね達成することができた。

１０　事業の実施内容

平野早矢香氏による卓球講習会およびその後の実施報告書の掲示

11　実施団体と担当課の事業評価

４はい　３どちらかといえば「はい」　２どちらかといえば「いいえ」　１いいえ

調査項目	団体	担当課
(1)事前の話合いを十分に行い、役割分担は明確になっていた	4	4
(2)事業に最もふさわしい協働形態が選択された	4	3
(3)協働の役割分担は適切だった	4	3
(4)協働相手は適切だった	4	3
(5)対等な立場での協力関係を築けた	4	4
(6)協働相手の自主性・自立性は尊重された	4	4
(7)事業実施は円滑になされた	4	4
(8)設定した目標が達成された	3	3
(9)協働で行うことにより効果がある事業だった	4	2
(10)今後の課題と改善策をお互いに話し合った	3	2

12　まとめ（今後の課題や改善点など）

・団体側

目標についてはおおむね達成することができた。講習会実施後にも非常によかったとの意見が参加者から多数入り、連盟として実施をする事ができてよかったと考えています。来年度以降も実施してほしいとの声が多くあったので、同様の事業を続けていけたらと考えています。

反省点としては、当初平野早矢香氏が獲得したオリンピックメダルや使用した用具の貸与を受け、実施報告書と合わせて展示をする予定でしたが、相手方からの許諾を得ることができず、実施報告書のみの展示となってしまったことです。

13　その他

特になし

事業報告書

事業名

日本サッカー協会コーチングスタッフによるトレーニング講習会

～子どものやる気を引き出すスポーツ指導術～

写真

１　実施団体

(一社)青梅市サッカー協会

２　担当課

スポーツ推進課

３　実施時期

開催日:2018 年 7 月 29 日(日)

４　参加者

・一般市民　34 名

５　実施場所　青梅市総合体育館

第一スポーツホール、第一会議室、第二会議室

６　事業の目的

「日本サッカー協会コーチングスタッフ」を青梅市にお招きして、サッカー&フットサル指導者向けの講習会を行います。

小中学生を対象にした青少年育成事業は、青梅市内で数多く開催されてきました。その一方で指導者の育成事業に関しては、ほとんど行われていない状況です。

市内で最も競技人口の多いサッカー&フットサルをする子どもたちへのより良い指導を実現するには、良い指導者を育成しなければなりません。青梅市の指導者のほとんどが、お父さんコーチ、もしくは元お父さんコーチ、またはチームで長年指導しているおじさんコーチの方々であります。課題は、指導者たちが指導方法を学ぶ機会がなかなか無いことです。

指導者たちが学ぶ機会を作り、良い指導技術を獲得できるようにすることが目的で、その結果、より良い指導が実現され、子どもたちのやる気を引き出し、青少年育成が一層進むことを狙いとしています。

７　役割分担

・団体の役割

企画運営、当日運営、講演者・実技指導者・実技補助員との調整、広報活動、広報

・担当課の役割

広報活動

８　事業の効果（どのような地域課題が解決できたか）

現在、フットサル U19 日本代表監督&日本代表コーチである鈴木隆二氏をお招きしました。

まず第一会議室にて、スペインでの指導者としての体験談、スペイン(カタルーニャ地域)における育成システムの状況、指導方法の理論を講演。

その後、第一スポーツホールにて、U19 フットサル日本代表の選手たちの練習の指導を見学。

再び、第一会議室に戻り、なぜこのような練習をしたのかという説明をしていただきました。

一連の講演を経て、青少年のサッカーやフットサルの指導にあたっている参加者たちから、多くの質問が出ました。指導技術に関する様々な視点や意見が展開され、青少年育成につながっていくものと考えられます。

目標達成

事業の目標：指導者たちが指導方法を学ぶ機会を創出する。

目標の達成具合：第一回目の開催でした。非常に意義ある講演。今後も継続的に続けていきたいと考えています。事務作業・手続きなどの基本的なベース作りが達成されたと考えます。

10　事業の実施内容

2018 年 7 月 29 日(日)

・青梅市総合体育館にて

第一会議室 16:45～18:20

フットサル U19 日本代表監督&日本代表コーチ鈴木隆二氏・講演

第一スポーツホール 19:00～20:30

U19 フットサル日本代表の選手たちの練習の指導を見学

第一会議室 20:40～21:00

鈴木隆二氏・講演、練習方法の解説

第二会議室

U19 フットサル日本代表の選手控室

11　実施団体と担当課の事業評価

４はい　３どちらかといえば「はい」　２どちらかといえば「いいえ」　１いいえ

調査項目	団体	担当課
(1)事前の話合いを十分に行い、役割分担は明確になっていた	2	2
(2)事業に最もふさわしい協働形態が選択された	3	2
(3)協働の役割分担は適切だった	3	2
(4)協働相手は適切だった	4	3
(5)対等な立場での協力関係を築けた	2	2
(6)協働相手の自主性・自立性は尊重された	4	4
(7)事業実施は円滑になされた	4	4
(8)設定した目標が達成された	4	3
(9)協働で行うことにより効果がある事業だった	3	3
(10)今後の課題と改善策をお互いに話し合った	2	2

12　まとめ（今後の課題や改善点など）

・指導者講習会を定期的に開催する。

・受付方法のインターネット化により、事務作業が軽減された。

・オリンピック・パラリンピックの関連事業も検討する。

・空調のない第一スポーツホールでの夏の開催は厳しい

13　その他